
ライダーの世界がもしも一つだったら ~ライダーワールド~

sinne-キヨノリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライダーの世界がもしも一つだったら〜ライダーワールド〜

【Nコード】

N8328Y

【作者名】

s i n n e - キヨノリ

【あらすじ】

もしも全てのライダーの世界が一つだったら・・・。そんな作者の想像から生まれた小説です。主人公は誰がどう言おうと剣立カズマと辰巳シンジとかリイマジ。オリジの出番はリイマジと比べると少ないかもです。完全ギャグです。キャラ崩壊も含みます。結構ありがちな設定とかが出ますが気にしないで下さい。

「話」「カズマのストレス：鈴海姉弟の恐怖」（前書き）

カズマ「で、新小説始まったけど・・・」

一真「どうしたんだ？」

カズマ「俺が最初から・・・」

一真「ま、それは見てのお楽しみだ」

ララ「なんか似たような小説あるかもしれないけど、これはもう本当に作者の妄想だからね」

弟切「・・・」

「話「カズマのストレス：鈴海姉弟の恐怖」

彼は、其処に立っていた。

「はあ……。今日も遅刻かあ……」

青年、創立カズマは溜息をついていた。

彼はBOARDという会社の社長（代理）。

最近夜が眠れないらしく、遅刻しがちである。

「カズマ。お前今日も遅刻か……」

カズマの先輩である菱形サクヤは言った。

「最近アイツらが煩くて眠れないんだよ」

「大丈夫か？」

「まあ、ね」

サクヤはカズマを心配している。

「お前は一応社長代理なんだぞ。ちゃんと健康管理とかしろよな」

「はいはい……。はあ……」

彼はサクヤに言われながらも、溜息をついていた。それは、彼が住んでいる所の隣部屋の人物のせいなのだが……。
その人物は、カズマの真後ろに居た。

「うえあっ！」

「おはようございますカズマさん！今日はソウジさんが社会科見学として僕とアスムを連れてきてくれたんです！」

「すみませんカズマさん。でも楽しそうだったので、昨日は眠れなかったんです」

「よ、カズマ」

ワタルとアスムとソウジ。

ソウジは実家に住んでるので原因にはなっていないのだが、この子供二人。アスムとワタルが昨日色々どんちゃん騒ぎをしていて眠れなかったのである。

「おーまーえーらー」

「まあまあ、怒らなくて良いだろう。実際、二人は今日を楽しみにしてたんだからな」

ちなみに、見学予約はしっかりとってある。だからこそ、カズマは余計イラついている。

「カズマ、アンデッドがでてK「剣崎さんとムツキ行かせろ、俺は社会科見学してる子供達の相手をしなくちゃならない」

「カズマ落ち着け！」

「俺は此処の社員じゃないぞ！」

サクヤの言葉にカズマは八つ当たりするように言う。

ちなみに、ムツキはともかく、剣崎はBOARDに入り浸ってはい
るし、ブレイバックスはもっているが、BOARDの社員では無い
為、ただとばつちりをくらっているだけだ。

「じゃ、ソウジさん、この二人の子守は俺がしとくんで、ソウジさ
んはZECT見に行つててください。天道さんが何やらかすか分か
りませんし、弟切さんは弟切さんで貴方に誤解される事しそうです
し、加賀美さんは加賀美さんで熱くなりすぎて色々ありますし。ア
ラタさんも加賀美さんと一緒になってやらかしそうですし、行った
方が良いと思いますよ」

カズマがZECTの心配をするも

「いや、俺も実はBOARDの中を見てみたかったんだ。まあ、あ
つちは天道と弟切に任せるからな。変な事やらかしたらアイツに制
裁くらわせるつもりだしな」

「アイツって……。もしかして、鈴海ルルですか？それとも姉の
方ですか？」

ソウジは笑っていった。

「どっちもだ」

「それは逆らえないですね……」

カズマは苦笑いする。

所変わってこちらは鳴海探偵事務所。

左翔太郎と園崎来人ことフィリップが事件の話をしていた。

「翔太郎、今日も事件だよ」

「何だ？今度は」

フィリップは言う。

「何だか、不審者っていうか、変な人が出るらしい。発見者の証言によれば、その人の顔は恐怖するほど恐ろしいらしい」

「誰だ？」

「うーん、証言によると、男性で、青い服を着ていて、青いバイクで・・・」

「分かった・・・。剣立カズマだろ。アイツは、最近溜まってるらしいからな」

「今日も、とばっちりで剣崎さんとムツキがアンデッドの封印に行かされたって」

「おいおい、ムツキはともかく剣崎は社員じゃないだろう・・・」

「顔出してるしライダーになれるからって理由でらしい・・・」

「はあ・・・」

そのカズマの行動には、翔太郎も呆れていた。

喫茶店兼宿泊場所のマリンチェリアには、鈴海ララとルルが居る。

「で、ソウジさんにストッパー頼まれたの？そのまま」

「うん・・・断りきれなくて・・・」

「まあ、良いけど。じゃ、ZECTに行くよ」

「うん」

二人は、ZECTに行く事にした。

＼ZECT＼

「てわけで、ソウジさんに頼まれて、何かやらかしたら私達が制裁を下しますっ」

ララは弟切ソウと天道総司と加賀美新とアラタに言っていた。
超絶の笑顔で。

「あ、ああ・・・」

弟切ソウはソウジに擬態したワームだ。

ララの使えそうだから生かしておいてという言葉だけで生きれているワームだ。

ララの言葉の力は多大で、ララに逆らうとまずい事があるという噂がある。
なので、弟切ソウはララに逆らえない。勿論、他の加賀美、天道などもだ。

「何かやらかしたら私の権限で弟切さんの命は無いと思ってください」

その笑顔は超怖い。ちなみに、彼女に悪気は無い。大事な事だからもう一度言う、先ほどの彼女の言葉に悪気は無い。

天然Sなのだ。

なので、逆に弟切や天道は恐れている。

一体、これからこの世界で何が起ころのだろうか・・・？

続く

「話」「カズマのストレス：鈴海姉弟の恐怖」（後書き）

ララ「あとがきは作者との対談！」

作者「はい」

ソウジ「鈴海最強伝説・・・」

作者「ララに質問！」

ララ「何？」

作者「ララって、皆の事どう呼んでるの？」

カズマ「作者なら其処分かれよ！」

ララ「えっと・・・」

ユウスケ ユウスケ君

ワタル ワタル君

シンジ シンジ君

カズマ カズマ君

タクミ タクミ君

ショウイチ ショウイチさん

ソウジ ソウジさん

アスム アスム君

五代 五代さん

津上 津上さん

真司 城戸君

乾巧 巧さん

剣崎 剣崎さん

ヒビキ ヒビキさん

天道 総司君

野上 良太郎君

紅渡 渡さん

士 士君

左翔太郎 翔太郎君

フィリップ フィリップ君

映司 映司君

弦太朗 弦太朗君

だよ！」

カズマ「長い説明有難う！」

二話「映司の苦勞：子供達（+ソウジ）の社会科見学（前書き）」

映司「二話で早速僕の身に何が……」

カズマ「さあ？」

タクミ「はあ……」

アスム「今回は師匠出してくださいよ……」

ララ「今回は無理かも……」

二話「映司の苦勞：子供達（+ソウジ）の社会科見学

子供二人と三十路は上機嫌だった。

ずっと気になっていたのだろう。

BOARDの中身が。

「ふふふふふ」

「子供達とはかく、ソウジさんは上機嫌にならないでください、
なんだか三十路の人がそんなことしていると正直引きます。えっと、
こっちは情報管理室です。アンデッドについての情報がびっしり
詰まっていたりするので、あまりこの中に人は入れないです」

「アスム！見てください！パソコンが沢山あります！」

「パソコン・・・ですか・・・？」 ↑あまり機械には慣れていない

「ふむ」

「で、こっちは訓練室です。まあ、特にムツキとか剣崎さんとか色々な人が入り浸っています」

訓練室にカズマが案内した、その行動が、駄目だったのかもしれない。

「カズマさん！訓練ですか！？少しやらせてください！」

と、アスムがこんな事を言い出したのだ。

「え？」

カズマは驚いた。鬼の修行をしてるとはいえ、こんな子供が大人のやるような訓練をするのは・・・と思ったのだ。

「大人と同じプログラムにしてください！」

「ぼ・・・僕は遠慮します・・・」

「俺は・・・少しやってみようか」

という事で、何故か丁度悪いタイミングで帰ってきてしまった剣崎を巻き込んで、カズマもやる事になってしまった。

「えーっと、じゃあ、かるーく説明します。まず、模擬戦をします」

「「どんだけリアルな訓練なんですか!？」」

アスムと見物者のワタルが言った。

「なら、やらなくていいんだけど、アスム」

「でもやります!」

「えっと、この機械の中に入ってやります。この機械は総て連動してるので、まあ、丁度俺と剣崎さんとアスムとソウジさんで四人だから二対二で出来るね。剣崎さん」

物凄い笑顔でカズマが剣崎に言った。

剣崎は

（コイツ絶対それ分かって引き止めたな・・・！）
と思っていた。

ちなみに、チーム分けは
アスム・ソウジ：カズマ・一真
になった。

「準備はいいですか？じゃあ、レディ・・・ファイツ！」

「・・・・・・実況兼審判はワタル、解説は俺、相川始でやらせてもらっ」

『おい！』

意外な人物、始が居た事に剣崎は突っ込む。

「黙れケンジャキ」

*ちなみに作者は始さんの性格分かってません

『というか、もう戦闘は始まってますよ！』

「おーっと！余所見をしている剣崎さんにアスムが特攻を仕掛けてきます！が！」

『うええええええええええ！』

『剣崎さん！危ない！』

「おーっとカズマさんが剣崎さんを助けに入った！解説の相川始さん、これは一体どういう事でしょうか？」

「・・・・・・・・第三のジョーカー候補だな、アイツ」

「ちゃんと解説してください!」

*ちなみにこの小説では剣崎さんはジョーカー。相川さんもジョーカーという設定です。

『俺は人間だあああああああああああああああああああ! !!絶対にジョーカーにはならないからなああああああああああああああああ! !!!!!!』

ちなみに、カズマは全力で否定していたが。

『ふ、剣崎、隙あり!』

『うえいうえあ!!??』

「おっと!此処で今まで何もしていなかったソウジさんが剣崎さんに特攻してきました!」

『つていつか今の声は何だよ!』

「戦っていても全力で突っ込みをするカズマさん!解説の相川さん、これはそういう事でしょうか?」

「・・・・突っ込みとしての本能。体にしみこんでいるのか・・・」

「何ですかその言い方!?!」

『つていつか社会科見学は何処行つた!』

『そんなのはもう宇宙の彼方に行きました!』

「アスムは少し自重してください!」

「……（アイツ、本当にジョーカーに出来るな……）」

ちなみに、カズマは何やかんやで剣崎さん守ってます。

「翔太郎」

「何だ?フィリップ」

フィリップは、相棒の翔太郎に言つた。

「映司が、翔太郎に相談したい事があるって」

「……はあ……」

「どうしたんだ?映司」

「ああ……聞いてくれよ……」

「あ、ああ……。まあ、とりあえず座れよ」

翔太郎は映司を椅子に座らせる。

「で、何だ？映司」

「あ、ああ……。実はな……」

映司は一息ついていった。

「アंकが夜中ずっと煩くて寝れないんだ。そして、外に出たかと思うと、ヘマをするガメル、ウヴァ、カザリ、メズールに毎回出会ってフォローして、アंकがアイスアイスうるさくて、拳句の果てに飛ばされてきた弟切さんにぶつかって……」

「……………。よし、ララの所に泊めてもらえ、あそこなら安全だしな」

「アंकには、僕たちから言っておくよ」

「うん……。頼む……」

続く

二話「映司の苦勞：子供達（+ソウジ）の社会科学見学（後書き）」

意外に社会科学見学の話が・・・。

飛ばされてきた弟切・・・。多分ララに飛ばされたんだと思います。何かへマして。それがソウジさんにやられたか、加賀美に巻き込まれたか、天道に振り回されたか。

では、また次回お会いしましょう！

三話「社会科見学終了：天道総司対鈴海ルル（前書き）」

カズマ「社会科見学に結構時間使ってるよな・・・」

ユウスケ「・・・」

ルル「それにしても、まだあまりコツチの様子が出てないな・・・」
ララ「だから今回でるんだよ！」

三話「社会科見学終了：天道総司対鈴海ルル」

「えっと……。じゃあ、次は……」

「僕、社員食堂に行ってみたいです！」

カズマの言葉を遮ってワタルが言った。

「へ？何で？」

「だって、どんなところか見てみたいんですよ！」

「あ、僕も見てみたいです！それに、土さんと師匠がはじめてあった場所ですし！」

「は……はあ……。ソウジさん、剣崎さん。其処で良いですか？」

「ああ」

「良いけど……。てか俺も一緒に行く前提なのかよ！」

何気に巻き込まれてる剣崎はともかく……。一行は社員食堂に行く事となった。

「…………ドンマイ、剣崎さん」

「…………頑張れよ、剣崎」

ちなみに、陰からムツキとサクヤ、それに何故か橘も剣崎を見守っていた。

「じゃ、ZECTのみなさん♪ちゃんと仕事してくださいね！」

「しないと締める」

「「「は、はいいいいいいいいいい！！！」」」」

「ある意味恐怖だな・・・」

「俺は誰からの指示も受けない。俺は俺の道を行くだけだ」

「天道、この二人には逆らったら駄目だって・・・。はあ・・・」

「加賀美は大丈夫だと思うが、だって、一応、トップのご子息なんだしさ・・・」

ゼクトルーパーの皆さん、弟切、天道、加賀美、アラタの順番で喋っている。

ちなみに、加賀美の父がZECTのトップな為、本当にララとルルは最初から加賀美に手出しするつもりは無い。

「じゃあ、最初は訓練しましょう」

「・・・あの・・・ソウジからの・・・言葉なんだ・・・。逆らったら・・・まず弟切は・・・無事じゃ済まないって・・・。分かってるよな・・・。クロックアップして・・・。ボコって・・・」

・くるかも・・・」

「!？」

「いや、ルル。ソウジさんはそんな事しないって・・・」

「冗談だよ・・・」

ルルの言葉に、弟切は冗談じゃない気がしつつ、訓練をする事にした。

「・・・・・・・・ララちゃん、ルル君・・・居る・・・？」

「あ、映司君。どうしたの？元氣ないけど」

「元氣がないというか・・・生気が無いに近い・・・」

半分死にかけの映司がララ達の所へ来た。

「ははは・・・アंकやカザリ達のせいっくほっくっくっくっくっく
うっくっくあっ！」

「大丈夫!？」

「何だよその咳のしかた！」

ララが心配する横で加賀美が映司の咳に突っ込む。

「じゃあ・・・私達の家に泊まる？あの人達には私から言ってお
くから。彼等には煩くしたら駄目ってきつゝく言っておくから」

「うん・・・あり・・・が・・・と・・・」

「おい、おきろー！おーきーろっ！」

ボタン。

映司はついに倒れた。

ちなみに、ララとルルがその場を離れた為、サボっていたら制裁する
という条件付きで各自仕事をする事となった。

一方、BOARDでは、意味不明の料理対決が始まっていた。
それまでの経緯は・・・。

『お、ソウジ』

『ん、津上か、何故お前が此処に居る？』

『ああ、実は、何回か此処で見てるんだよ。社員食堂の料理とか色々』

『成る程な』

『で、ソウジ。お前におでん対決を申し込みたいんだ』

『ああ、いいが』

という事で、おでん対決・・・もとい、料理対決が始まったのであった。

「俺達を無視して話を進めるな――！！！！！」

カズマの渾身の突込みが入る。

「まあ、良いじゃないですか。僕達も丁度お腹が空いてきた頃ですし」

「はあ・・・分かったよ」

「よし、行くぞ、ソウジ」

「何処からでも掛かって来い」

「よーいつスタート！」

そして、数十分後

「はい、これが俺のおでんだ」

「天堂屋の伝統のおでんだ。具が少ないと言っつなよ」

（色々すつとかばして結果発表）

「で、結果は？」

「「「「・・・ソウジさんの」「」↑ソウジからの気迫が凄かった

「はあ・・・なあ、もう帰って良いか？気付いたらもう帰る時間なんだが・・・」

「あ、確かにそうですね。僕たちもう帰ります」

そして、社会科見学は終わったのだ。
最も、数人は被害にあったようだが。

「・・・広瀬さん」

「どうしたの？剣崎君」

「・・・俺、疲れました・・・」

「・・・」

「あ、カズマ君、アスム君、ワタル君。お帰り。で、ごめんけど、今夜はあまり騒がないでね」

「何ですか？」

「今日は、映司君を泊めてるの。だゝいぶつかれてるようだったから、静かにしてね」

「「「はい」「」」

続
く

三話「社会科見学終了：天道総司対鈴海ルル（後書き）」

ララ「ちなみに、カズマ君達三人は私の家に泊まってるの」
ルル「カズマが保護者代わりなんだってさ」

カズマ「あと一人泊まってるの。まあ、言わないけど、まだ」
ララ「じゃ、時間が無いからさいなら」

四話「シンジの出勤：W龍騎の恐怖（前書き）」

シンジ「サブタイトル考えた奴ぼこる」

真司「……………」

リュウガ「……………」

*本作品にはリュウガも登場するっぽいですが（作者はリュウガについて大して知識はないです〓無謀）

四話「シンジの出勤：W龍騎の恐怖」

「遅れるー！！！！！！」

青年、辰巳シンジは、急いで出勤していた。

彼はバイクを持っていない為、無論、全力疾走だ。

「あゝもう！あいつら騒ぐなって言われてたのにまた騒いで！あの三人怒らせたら後が無いって分かってるだろ！」

「シンジ」

「カズマ！」

全力疾走するシンジの横を、ブルースペイダーに乗ったカズマが通りかかる。

「今かまってる暇は無いんだ！僕は行くからな！」

「なら、俺が連れてってやるよ」

「いいのか！？」

「ああ、幼馴染のよしみとしてな」

*この小説ではリイマジ組は年齢が近い人たちは大体幼馴染という設定です。

例えばショウイチとソウジ。カズマとシンジとユウスケとタクミ。アスムとワタルとタクミ。

タクミの名前が二つ拳がつてる理由はいいません。

「じゃ、ありがたく！」

そして、シンジはカズマに乗せて行つて貰つた。

此処はATASHIジャーナル。辰巳シンジの働いてる場所である。

「レンさ〜ん！遅れてすみません！」

「ああ、シンジか」

彼は羽黒レン。辰巳シンジのパートナーである。

こらそこ、ホモとか言うんじゃない、ヤンデレとか言うんじゃない。

「どうしたんだ？遅れるなんてお前らしくないな。ま、行くぞ」

「はい！」

「は〜、今日は休みか〜」

こちらは城戸真司。辰巳シンジとはとても仲が良い。

城戸真司はOREジャーナルというところで働いてる、だが、今日は特別休暇を貰って暇にしている。

現在、ブラブラとしている。

「あ、城戸さん」

「あ、えっと……。シンジの幼馴染の一人の……」

「小野寺ユウスケです」

「あ、そうそう。で、どうしたんですか？」

*ちなみに作者は龍騎未視聴の為、城戸さんの性格これで良いのか
分かりません……。

「いえ、なんでもありません。見かけたただけなので」

「あ……。はあ……」

そう言ってユウスケは去って行ってしまった。

「一体、なんだったんだろう……」

「ふー、今日も取材終わった」

「シンジ」

「あ、何ですか？レンさん」

「今日はもう帰って良いぞ。城戸は今日特別休暇で暇してるからな、
相手してやれ」

「はい」

「きどさん」

遠くから辰巳シンジが走ってくる。

「あ、シンジ。どうしたんだ？」

「レンさんが城戸さんが暇してるから相手してやれって」

「へえ・・・」

「うん。そうだ。マリンチェリア行きますか？」

「え、ララちゃん達に迷惑じゃないかな・・・？」

城戸はそう思いながらも、辰巳シンジに連れられてマリンチェリアに来た。

「あ、シンジ君おかえり」

「城戸・・・いらっしやい・・・」

「相変わらずルル君は無愛想だな」

城戸は苦笑いしつつ席に着く。

「あれ？いつも居るアスム君とワタル君は？」

「プティラに制裁を下されてる途中だよ」

フラちゃんがそう言うて、よく耳を澄ましてみると……。

「あ、やめてください！映司さん！目を覚ましてください！」

「ごめんなさい！もうしませんから！もう夜に騒ぎませんからう！」

[illegible]

「つていう事で」

「「つていう事で済む問題じゃないだろ！」」

W
シンジは突っ込んでいた。

「わああああああああ！！やめてください良い良い良い良い良い良い意！」

「子供に何してんだあの人！」

続く

四話「シンジの出勤：W龍騎の恐怖（後書き）」

ララ「映司君の受難？」

ルル「映司が怒るのも仕方ない」

映司「何あれ龍騎怖い龍騎が怖すぎてどうしようもない・・・」
↑
ブツブツ

五話「仮面ライダーの活用性：二つの学校」（前書き）

ララ「前回できなかった関係図です・・・」
ルル「超脇役とかはまた今度」

リイマジ

小野寺ユウスケ

友達・・・五代雄介・城戸真司・剣崎一真・門矢士・ワタル・辰巳シンジ・剣立カズマ・尾上タクミ・アスム・如月弦太郎

ワタル

友達・・・紅渡・左翔太郎・小野寺ユウスケ・アスム・尾上タクミ

辰巳シンジ

友達・・・城戸真司・乾巧・剣崎一真・野上良太郎・小野寺ユウスケ・剣立カズマ・尾上タクミ・如月弦太郎・鈴海ララ・鈴海ルル

剣立カズマ

友達・・・城戸真司・乾巧・剣崎一真・野上良太郎・紅渡・小野寺ユウスケ・辰巳シンジ・尾上タクミ・門矢士・如月弦太郎・鈴海ララ・鈴海ルル

尾上タクミ

友達・・・乾巧・安達明日夢・野上良太郎・野上幸太郎・如月弦太朗・鈴海ララ・鈴海ルル

芦河シヨウイチ

友達・・・五代雄介・津上翔一・ヒビキ・天道総司・ソウジ

ソウジ

友達・・・五代雄介・津上翔一・ヒビキ・天道総司・芦河シヨウイチ

アスム

友達・・・安達明日夢・小野寺ユウスケ・ワタル・左翔太郎

* 海東は師匠

五話「仮面ライダーの活用性：二つの学校」

こちら辺には、高校が二つある。

青色の制服の天ノ川学園高校。通称天高。

灰色の制服のスマートブレイン高校。通称・・・何だっけ？。

まあ、とりあえず、この二つの高校は、もう合併しろよ、って言うくらいに仲が良い高校。

この人達もまた、結構仲が良いのである・・・。

「タクミー！よ！」

「あ、弦太郎君」

如月弦太郎と尾上タクミ。この二人は、同じ仮面ライダーといふとか色々で仲良くなった二人組である。

「弦太郎君、どうしたの？」

「いや、ちと、手伝って欲しい事があるんだ」

「？」

弦太郎に言われるまま、タクミは弦太郎についていった。

そして、タクミが着いた場所は・・・。

「で、何なの？皆集まってるけど・・・」

皆集まってる・・・とは、平成ライダーの面々（+α）が集まっているのだ。

「あ、タクミ」

「カズマさん、これ、何ですか？」

「これはな、平成ライダー（+α）で仮面ライダーの活用性について話してるんだ」

「で、タクミが555をどのように活用してるか聞きたくて、つい俺が連れてきちゃったんだ」

「はあ・・・。555をそんな風に使うわけ無いじゃん・・・」

（でも、555のファイズエッジって、結構警棒に使ってベタなネタがあるんだよね・・・。僕はしないけど・・・）

そんなことを思いながら、タクミは、弦太朗の方を見て言う。

「そういえば、弦太朗君は、フォーゼを何に使った事があるの？戦い以外で」

「俺は・・・特に、無いな」

「でしょ？そうそう、あまり使わないって・・・」

タクミがそう思っているとユウスケたちが話してる辺りでこんな会話を聞いてしまった。

「ユウスケはさ、クウガ何に使った事がある？」

カズマが、ユウスケに聞いた。

「ん〜、俺は、あねさんに格好つけようと、クウガに変身してバイクで出勤した事がある。すぐ怒られたけど」

「何だその馬鹿な使い方！」

「そういうカズマも、馬鹿な事に使ってるんじゃないかな〜」

カズマの言葉に、シンジが訊く。

「俺は・・・無いな」

「え〜、ベタなブレイライザーで料理作るとか無いのかよ〜」

「シンジだって、何か使ってるのかよ」

「う〜ん、僕は・・・」

その後、馬鹿馬鹿し過ぎる返答が返って来た。

「レンさんの居る場所に行く為に龍騎に変身してミラーワールド入ってレンさんの居る場所の近くの鏡に移動した事がある。城戸さんに会う時も同じような事使ったことがある」

「・・・シンジ・・・」

「それは・・・無いな・・・」

「ユウスケさんも、シンジさんも馬鹿馬鹿しすぎますよ・・・」

「あ、タクミ」

我慢の限界だったのか。突っ込まずに入られなかったのか、タクミは会話に割って入っていた。

「タクミは・・・さつき無いって言ってたか、ツマンネ」

「もし使ったとしてもシンジさんとかユウスケさんとかと同じようには使いませんよ・・・。それに、移動とかならオートバジンがありますし」

「良いよね」。三人はバイクあつて・・・」

「あ・・・」

そうだ、ディケイド本編で、ユウスケ、カズマ、タクミには、ちゃんとバイクがあるという描写があつたのだ。

でも、それ以外のリイマジには、バイクがあるという描写は無かつた。

まあ、子供二名は仕方ないが。

「二号ライダー的存在である海東にバイクが無いのに、この三人にはちゃんとして、バイクがあるよね」

「やめて・・・やめてくれ！シンジ！カズマ、シンジを止めてくれ！このままだとバイクが無いというだけで地獄兄弟の仲間になって

しまう！」

「それだけは嫌だ！」

「何やってるんですか・・・ばかばかしい・・・」

子供のワタルにまで、こんな事を言われる始末だった。

（どうしよう・・・僕も、実は料理する時にザンバットソード使ったんだよね・・・）

（それ・・・ワタルもベタですね・・・。ちなみに、僕は音撃棒で普通に太鼓演奏しましたよ）

（それ・・・普通の使い方だね・・・）

ちなみに、上から順にワタル、アスム、タクミである。

つづく

五話「仮面ライダーの活用性：二つの学校」(後書き)

ララ「オリジの人たちです」

オリジ

五代雄介

友達・・・津上翔一・ヒビキ・小野寺ユウスケ・芦河ショウイチ・
ソウジ・フィリップ

津上翔一

友達・・・五代雄介・ヒビキ・天道総司・芦河ショウイチ・ソウジ
城戸真司

友達・・・乾巧・剣崎一真・小野寺ユウスケ・辰巳シンジ・剣立力
ズマ・左翔太郎・火野映司

乾巧

友達・・・城戸真司・剣崎一真・ほっとけないらしい野上良太郎・紅渡・尾上タクミ・
辰巳シンジ・剣立力ズマ・フィリップ(いつのまにかつるんだ)

剣崎一真

友達・・・城戸真司・乾巧・紅渡・門矢士(友達と言うより会う度
喧嘩してる)・小野寺ユウスケ・辰巳シンジ・剣立力ズマ・左翔太郎

ヒビキ

友達・・・五代雄介・津上翔一・相川始（何でだろう・・・？）・
芦河シヨウイチ（こらそこ、映画で共演してたとか言うんじゃない、
キラメキとか言うじゃない）・ソウジ

安達明日夢

友達・・・アスム・アスム・尾上タクミ・如月弦太郎

天道総司

友達・・・津上翔一・野上良太郎（何故・・・）・門矢士（妹居る
同士、仲良くな）・ソウジ・芦河シヨウイチ・フィリップ（友達と
言うより付き纏われている）・鈴海ララ

野上良太郎

友達・・・乾巧・天道総司・紅渡・剣立カズマ・辰巳シンジ・尾上
タクミ・火野映司・如月弦太郎

紅渡

友達・・・乾巧・剣崎一真・野上良太郎・ワタル・剣立カズマ・門
矢士（会う度喧嘩してる）・フィリップ・火野映司

門矢士

友達・・・剣崎一真・天道総司・紅渡・小野寺ユウスケ・剣立カズ

マ・左翔太郎

左翔太郎

友達・・・城戸真司・剣崎一真・門矢士・アスム・ワタル（なつかれてた）・フィリップ・火野映司・如月弦太郎

フィリップ

友達・・・五代雄介・乾巧・天道総司・紅渡・左翔太郎・火野映司・後藤さん

火野映司

友達・・・城戸真司・野上良太郎・紅渡・左翔太郎・フィリップ・如月弦太郎

如月弦太郎

友達・・・安達明日夢・野上良太郎・剣立カズマ・辰巳シンジ・尾上タクミ・小野寺ユウスケ・火野映司

ララ「です！」

六話「カズマの暴走：それ違う番組（前書き）」

ララ「・・・」

士「大体分かった。風m「はいネタバレ禁止！」↑カズマ

六話「カズマの暴走：それ違う番組

「はあ・・・」

「・・・どう・・・したの・・・？ララ・・・」

溜息をつくララに、たずねるルル。

「ああ、何か、酒、呑みたいなあ・・・って」

「・・・」

突然のララの言葉に、ルルは何が分からなかった。

「てわけで！飲み会しよう！」

「・・・突然過ぎるわ！！！！」

ララの言葉にユウスケ、カズマ、タクミ、巧が突っ込む。

「会場は此处。マリンチェリア！てか今からはじめる！」

「・・・自重しろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

自重しないララに、先程の四人が突っ込む。

「でも、まあ、良いんじゃない？僕も最近やりたかったし、リイマジとオリジ集まって」

辰巳シンジが言った。

「シンジ君ノリ良い！よし、じゃあやろうそうしよう！-」

と言う事で、強引な飲み会が始まったのである。

「で、僕達未成年組はジュースですか」

「あれ？ララさんはこっちじゃないんですか？」

「ふえ？えっと・・・私、お酒のみたいにな～って」

*未成年の飲酒は禁止されています

「駄目駄目！ララちゃんは未成年でしょ」

カズマがララをタクミ達の所へ連れ戻す。

「あ・・・」

その時、ユウスケは違和感と微妙に慣れた気配を感じた。

「まったく、あ、ユウスケ君。一緒に飲もう」

「はあ！？」

カズマが、完全に酔っている。

「お前酔うのお前昔からだけど早っ!」

「ほらほら、ユウスケ君もモタモタしてたらなくなるよ」

というか、カズマは少々麗羅化している・・・。

「カズマさん、一体どうしたんですか?」

「どうもしてないよ」

「いやいやいや・・・どうかしてるって!」

「ああ?」↑某三蔵の様な低い声で言う

「「「今度はそれかよ!!!!」」」

先程の四人からカズマを引いた三人が言う。

「大体分かった。カズマは酔うと中の人の他のキャラになるんだ!」

士が今までのカズマの行動で分かった事を言う。

「確かに・・・最もですね・・・」

タクミが士の言葉に同意する。

「っていうか・・・何処から・・・あの声・・・出して・・・る

「んだろう・・・」

ルルが、先程のカズマの行動で疑問に思った事を口に出していた。

「ん？あれ、えっと・・・昨日・・・何があったんだっけ？」

「あ、カズマ君、起きた？」

「あ、ララ。えっと、昨日何があったんだっけな」

「昨日は此処で飲み会したよ？その時にカズマ君が暴走して・・・」

「あゝ！」

カズマは思い出したように言う。

「俺・・・実は酔うと何か性格変わるって言ってなかった・・・」

「？」

ルルは疑問符を頭に浮かべている。

「何かさ、シンジとユウスケに聞いたんだけど、俺昔から酔うと何か、性格がコロコロ変わるって言われてんだよ」

「・・・成る程な・・・」

（っっていうか、中の人の別の仕事とか、そういうのだけど・・・）

「ふあゝ。うゝ、まだ眠いなゝ」

ララは、眠たそうに欠伸する。

「うわあっ！」

「・・・！？」

「どうしたの？カズマ君」

「何か炎出せた！」

「それ別の番組！」
「」

六話「カズマの暴走：それ違う番組（後書き）」

ララ「今回の話は作者が風魔の小次郎見てやりたくなつたネタです」
カズマ「最後の小ネタはパツと思いついたものだからな」
ルル「・・・パツとすぎ・・・」

七話「カズマ大暴走・シンジとユウスケはストッパー？」（前書き）

ララ「・・・暴走から、大暴走になったね」

ルル「・・・今回は・・・いろいろな意味で・・・暴走する・・・らしい・・・」

七話「カズマ大暴走：シンジとユウスケはストッパー？」

事件は、その朝、起こってしまった。

「うわああああああ！！！！」

「止まってカズマ君！！！！」

「カズマ、お前いい加減やめろ！」

「やめろって言われたって！」

此処はマリンチエリア。

いつもなら、此処で全員朝食を食べている、が。
現在カズマが暴走して、それ所ではないのだ。

『はあ・・・昨日のアレは、これの前兆だったのか・・・』

丁度アクアの水ログラムを出していたらしく、アクアがそう呟く。

「うん、だね・・・まあ、良いんじゃない？」

「・・・良くない（です）！！！！」

シンジ、ユウスケ（たまたま来ていた）、アスム、ワタルが叫ぶ。

ちなみに、カズマがどう暴走しているかと言うと・・・炎を出しまくっている。

手を少し振っただけで周りに火が移る。

「……とりあえず……店の外に……出して……。店
が……無残な姿に……なるから……」

「シヨウイチさんに連絡しましょう・・・」

アスムはそう言って、ユウスケに頼んで連絡を入れてもらう。

「僕達は……ZECTに連絡しようか……」

「はい。」

シンジとワタルはそう言うてた。

「何故ZECTまで呼んだと思えば……。何だこの惨状？」

ソウジ……ではなく弟切はカズマの惨状を見て溜息をついた。

「はあ……とりあえず、言っ
て良いか？」

┐
?
┐

シヨウイチの言葉にルルは首を傾げる。

「何故力ズマを鉄の壁で覆っているんだあああああああああ
 ああああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああああ

[illegible]

「……だって……燃え移ったら……危ないし……」

「アイツ自体が危ないぞ！」

「・・・・・・・・カズマ・・・・・・・・！」

「遅いぞ！ 気付くの遅いぞ！！」

ルルの天然ふりにシヨウイチは前面突っ込みをしていた。
ルルも、今更カズマが危ないと気付き、鉄のバリケードを壊そうと、悪戦苦闘していた。

「あ、ルル」

「シンジ……」

シンジがルルの近くを通った。

「ルルmこれをとるのか？」

「・・・」(コクリ)

「分かった、そりゃ」
↑バリケードの鉄を一つどける

「……シンジ……凄い……！」

「ルルお前素直に感心するな！カズマのバリケード取ったら周りが

危ないだろう！」

「ショウイチさんてんぱり過ぎてさっきと言ってること違う！」

てんぱっているショウイチにタクミが突っ込みを入れる。

というより、シンジの怪力には誰も言わないのだろうか・・・？

「シンジ〜！！ルル〜！！」 ↑炎に包まれている

「・・・カズマ・・・！！」 ↑カズマに抱きつきに行く

「カズマお前ルルから離れろ！ルル！お前もカズマに抱きつくな！お前も燃えるだろ！」

ショウイチがまたもや突っ込む。

今回はどうやらショウイチが全面突込みらしい

「今さらだろ！」

「ショウイチさん何処に話してるの！？」

タクミはショウイチが時々ボケた時の突っ込みか・・・。

「どけ〜！！！！」

「！？」

其処には、仮面ライダーフォーゼファイヤースティツが居た。

「・・・弦太朗・・・？」

「俺がその炎消してやるぜ！」

そう言つて弦太郎は水を発射した。

無事、炎は消し止められたとき。

続く

七話「カズマ大暴走：シンジとユウスケはストッパー？」（後書き）

ソウジ「前回に続いて麗羅ネタか」

ショウイチ「はあ・・・疲れた・・・」

ソウジ「そんな事で疲れていると、年寄りに見えるぞ」

ショウイチ「年寄りで良しさ、俺の中の人の年齢考えろ」

ソウジ「・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8328y/>

ライダーの世界がもしも一つだったら～ライダーワールド～

2011年12月3日18時47分発行